

平成29年度 第1回企画展（4月22日（土）～7月16日（日））

「平安の美 ～常滑の三筋壺～」 展

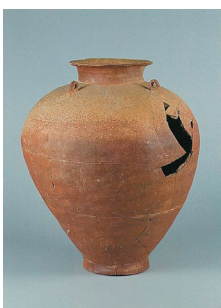
平安時代末期に知多半島で焼かれた「三筋壺」は、まさに常滑焼の象徴ともいえるやきものの一つです。

形態は胴部の上半に最大幅があり、上に向ってまっすぐ頸が伸び、口縁部は短く外反します。口縁から胴部には、焼成時にかかった薪の灰が自然釉となり、悠然とした自然美が表われています。常滑の壺は甕と同じく紐作りで制作されますが、外面の沈線はロクロ台に乗せてヘラや棒、二又工具を使って施文されます。壺を肩部から胴部にかけて3段の並行沈線が巡る三筋文は平安時代末期に好まれた装飾で、同じく猿投窯や渥美窯でも見ることができます。

知多半島には多くの窯跡が調査されていますが、三筋壺が出土した遺跡は少なく、これまでに23の遺跡で報告されています。『愛知県史』によれば、常滑市で15遺跡、大府市、阿久比町、半田市、美浜町でそれぞれ2遺跡が確認されており、多くが常滑市の北半部に集中しています。

三筋壺の生産が始まるのは1150年頃で、常滑市の古窯では大量に出土することもあり、軌道に乗った生産がうかがえます。しかし、鎌倉時代の成立頃（12世紀末）には終焉を迎えます。三筋壺の成立の背景は明らかとなっていませんが、12世紀前半に縦耳を4つ、底部に高台を付けた三筋の広口壺が見つっています。また、阿久比町宮津板山古窯址群では頸部と胴部の接続部に刻み目突帯あつらがあり、胴部に三筋文を施した長頸壺が出土しています。これらは類例がなく、特別な詠え物と考えられています。

三筋壺は東北地方や関西地方まで広く発見されていますが、お経を土中に埋納した経塚や古墓（中世墓地群）から出土することが知られています。残念ながら三筋壺の中からお経典が残っていた事例はありませんが、それを示すものとして、平清盛（1118 - 1181）が巖島神社いつくしまに奉納した平家納経の一つ「巖王品」ごんのうぼんの見返しにお経の飛び出す三筋壺が描かれています。このような状況はありますが、三筋壺は宗教との強い結びつきがみられる一方で、中世集落からも破片が出土しています。必ずしも用途の限定はできませんが、中型の貯蔵容器であり当時流行したデザインと考えられます。今日の三筋壺は茶の湯における美意識の中で再び見出されましたが、用の美や鑑賞の美だけでなく、当時の社会が求めた「平安の美」という視点で観るのもまた格別です。



四耳三筋文広口壺
（12世紀前半）



自然釉三筋壺
（12世紀後半）



自然釉三筋壺
（12世紀後半）



灰釉三筋壺
（江崎一生作）